

麻生路郎主幹

柳家新誌

三 月 號

川柳雜誌第三卷第三號目次

感想・評論

何故私は「がり切つてゐる乎」

麻生路郎

作家としての刀三

林田馬行

林田馬行論

井上刀三

雜感

竹馬居主人

斬髪せよ

井上刀三

研究・其他

三日路雜記

木村半文錢

二篇素讀後始末

蛭子省二

遅日莊柳談會

遅日莊主人

新戎橋より

庄萬よし

人がいゝ

林田馬行

漫畫春なれや

柴谷柴舟

柳壇のぞ記

徳田双柳

童謡くづし

黒木莢豆

川柳母娘番付

吉川啞人

近作柳樓 彙集句 各地柳壇會
報 川柳書架 川柳家戸籍調べ

後記

創作

川柳塔

原史風

同

塚崎松郎

同

伊藤彦造

同

林田馬行

同

西垣松雨

同

松本助六

同

關本雅幽

同

庄萬よし

同

岩崎柳路

同

麻生霞乃

同

森田輝翠

同

吉川啞人

同

黒木莢豆

同

太田朝陽

同

井上刀三

同

酒井駒人

同

橋本二柳子

同

安川久流美

同

近什

同

柳風スボーン

同

森東魚

同

魚

水了軒のお辨當

に會集・・・に行旅

山をほめ海をたゝへてお辨當



大阪梅
田驛前

水
了
軒

電話（北六四〇番
北一八三四番



何故私は、にがり切つてゐる乎

麻 生 路 郎

「漫畫家だから頗る洒落のめして暮して居るだらう斯ういふ風に考へる人が世間に以前數多くあつた。畫に文に僕等の必死の闡明によつてこの頃は大に少なくなつた。けれどまだある。こつちがふざけて暮して世相の眞實が掴まるものか」と一平畫伯はおつじやる。全くその通りだ。川柳家だつて、世間からはふざけて暮らしてゐるものだと思はれてゐる。けれどそれは大きな間違ひだ考へを入れ替へて貰ひたい。そりやあ、一部の川柳家にはふざけて暮してゐる人達がないでもない。そしてさうすることかほんさの川柳家だと思つてゐるらしいから全く始末がわるい。斯ういふと君達はいつても、にが

り切つてゐるのかさいふかも知れぬ。そしてほんさの川柳家は、にがり切つてゐなければならぬものかさ訖度反問するであらう。然り多くはにがりきつてゐる。それは、にがり切るべき多くの原因があるからだ。ふざけた川柳家に對して、川柳を誤解せる世間に對して、自分自身の穢汚に直面した時に對して私達はにがり切るまいさしても、にがり切らざるを得ないのである。私はそれ等の問題に對して随分多くの言葉を費して來た從來のふざけきつた川柳家も、川柳を誤解せる世間も、もういゝ加減に私を、にがり切らさないやうにしてくれともいゝと思つてゐる。



作家としての刀三

林田馬行

作家としての刀三君を云々する前に、まづ感ずるのはかの天折せる詩人村山槐多氏の事である。あの懐疑的な槐多の詩、純な、才そのもの、閃きである槐多の藝術に、我刀三君の作品が或共通點を持つてゐる云ふばかりでなく、その性格に於ても一味相通する所を發見したからでもある。

僕が今僕の周圍を振り返る。そしてそこに獨自の境地を拓いてすん／＼力強く進みつゝある我刀三君の姿を見出だすこゝは喜ばしき限りである。何等の束縛も受けず只是れ熱ミ力ミ才で押進んで来た君が光りある未來を抱いてゐる事は誰しも認むる所である。ミ共にそこにまた斷崖に佇立せるが如き危険の潜めるものも否まれない事實である。以下僕が君の作品に忘彈なき批評を加へて見やう。

- (一) 電車に轢かるゝ氣持を續ける
- (二) 鏡も恐ろしきものゝ一つなり
- (三) 地獄へ行ならむ死にたくはなし
- (四) 母が鬼子ミ云ひゝがまここ

斯うした心理的な作品が君に可成り多い。僕はどの句にも君

の凡ならざる詩才を認めるものである。殊に(一)の如き日々砂塵渦巻く都市に起居する人間の神經衰弱的な心理を遺憾なく表現してゐる。(二)にしろ(三)にしろ(四)にしろ君の鋭い大膽な主觀の表現に全く敬服せざるを得ない。

然し乍ら是等の作品を見て僕の尙満足し得ない點はリズムの問題である。君の是等の作品が十七字で不定型律に依らず内容律の表現に生きてゐる事は頷かれるが、リズムより見た是等の作品、殊に(二)(四)の如きに君が飽迄責任を持ち得る自信があり得るだらうか。甚だ疑ひなきを得ない。句に於けるリズムの問題は仲々重大である。爰に於て我々は深みミは何水甕に水のなきは机上より一尺低き民衆よ

斯うしたリズムカルな先覺の作品に敬意を表さなければならぬ。僕が常に十七字に捉はれざらん事を力説し尙且つこの定型律を尊重する所以即ちこゝにある。さて次へ移つて、

- (一) 裏切つた女よひミの子を生め

日車
半文錢
路郎

(一)云ふか云はぬだけなりひこも疲れてる
(二)見送つてまた明日から働かう

(一)の句からは女への強い怨嗟の聲が聞かれる。大膽なる手法ではある。(二)の句にも君ならでは掴み得ぬ處を握つてゐる點敬服する只上六少し説明的に陥つてゐるのを惜しむ(三)は巧な句である。こゝにも明かに君の主觀の流れを發見し得る

(一)母さんをなぶらお氣か云はれて居
(二)二日酔して庖丁の見ゆる部屋

君には斯うした寫實的作品も相當ある。(一)の句下五の表現稍々幼稚の厭ひはあるが、いゝ感じのする句である。(二)の句、こんな境地にも君が非凡な腕の持主である事が窺はれる然し君の性格としてはいつまでもこの境地に安住すべくもない。

(一)親類へ馬鹿を頼んに父は死に
(二)父親の短氣もやがて俺のもの

斯うした句は君獨特のものである。(二)の如き確かに成功せる主觀句云へやう。體驗より生るゝ作品の尊きさはこゝにも見られた。君の作品中では推賞に値する部類のものである。

尙この他にも可成り佳句はあるがそれはまた後日に譲る。さて斯く觀じ來るゝ君の作品には、その作品の凡てに鋭い主觀の流れを認むる事が出来る。そして可成り感覺の鋭敏な頭の所有者である事が知られる。その詩才がさの句にも溢れてゐる事は餘りにも明かな事實だ。

然し乍ら君の作品を一括にして評し得るならばまた「一個の

未完成藝術」なりと斷ずるに躊躇しない。何故なら君の作品には未だ精巧なる鍊磨を加へなければならぬ多くが残されてゐるからである。

一句を得るまでの苦しみ、斯うした惱みが今の君全體をそう強く支配してゐることは思はれない。何事にも比較的恬淡な君がその作品にも常に推鼓する事の怠り勝ちな如く思はれるのは君の爲甚だ遺憾であると共に尙君に多くの未來を暗示せしむる所以である。僕の評が今君の句作態度にまでおよぼす事は餘りにも濫越すぎるかも知れないが、君の口から稍々もすれば「全生命を托するには餘りにも小さき藝術よ」斯うした歎聲を聞く僕は、今君のこの誤れる知詩觀を歎かなければならないかゝる誤れる君の觀念が君の將來をも誤るゝすれば甚だ遺憾とする處である。もつこゝ苦しまなければならぬ。惱まなければならぬ。自信を持たなければならぬ。斯くせばやがてこの小さき藝術をおのれの藝術とすに何の不自由をも感じないに到るであらう。

以上可成り露骨なる苦言を呈した。尙最後に君に望む處は君の作品に、より深き思想と繊細なる技巧と強調されたるリズムの交錯があれば一層君の作品をして光彩あらしむると思ふがそれには仲々前途のある事でこの上の藝術的精進が望ましい。

作家としての刀三君の輪廓だけは以上で可成り盡されてゐると思ふ。我々はこの未來多き刀三君の前途を見守らなければならぬ。(二月九日夜記)



林田馬行論

井上刀三

凡そ天才は恐ろしく偏狹で、ミステイズムで、メランコリーである。ところが川柳家に至つては、この普遍的な天才要素は却て禍をなす様である。要するに川柳的に於ける天才は徒らに神秘であつたり憂鬱であつたりするまいけない云ふ事だ。此の意味より論じて川柳天才としてわが林田馬行君を舉げたい。馬行君の川柳は恐ろしく健實で思想上の聯鎖を巧に操つてゆく聯想的作家である。甘いセンチメンタルズを極端に否定する作家である。所謂理智的で、現實的で、ユーモリストである。彼の今日あわよく川柳家として恵まれた所以であらう。而して彼にして徒らにデカダン派に投じてゐたならば少くも今日の大成を見る事は出来なかつたであらう。路郎氏に共鳴し日車氏を読み半文銭氏を知らなかつた場合の彼は僅かに凡々たる作家として終つた事であらう。今日彼の確固たる存在は路郎、日車、半文銭氏に負ふ所頗る大であり、彼も亦己を知るに聰明であつた所以である。彼は高踏的作家である。所謂形式的、理智的で技巧を重視し、安價な感情に溺れ様はしない。ナイーブ即ち

自然で質朴で、生れたまゝの純情は、詩の要素であるかも知れない。けれどもこれは、童謡の境地である。川柳要素の全體でなければかりでなく、寧ろ川柳より遠ざけるべきであらう。前提が大變長くなつた。これから彼の所謂天才的カラーの著しい句によつて、彼を暫く讚美してみやう。

叙法の巧緻なる彼の一大特色であらう。この作家が如何に描寫への精進を續けてゐるか云ふ事はつきり判る。

タオル二筋下る二階の留守へ友
 兩の手はボケツに夜の砂利がなる
 眼醒しへグット生きたる胸が伸び
 繻帯を首に洋書の二三冊
 運轉手菜種の國をまつしぐら
 聯想的作家としての彼の頭のよさは敬服せずには居られない。
 處女らしく昔想ふた人に逢ひ
 人妻して見送りの中にあり
 加害者に遠く電車の灯がはしり
 灯を吹き消すことも毒婦らし

ロマンテイシズムを否定する彼、しかも感情的で淡い哀愁の伴ふ句がある あけてみやう。

心配を شدした母へ 向き直り
氣焔まで淋しきものとなり果てぬ
早いものもう夏服ごなつた戀

受感力の至つて鋭敏な作家は其最初に於て既に幸福である。一度これを自己即主觀して扱ふ時其處には鋭い詩の躍動がある
宙に浮く様な思ひの セル 時分
嬉しさの三町程も續きけり

技巧は兎角獸味になり易く、詩格が全然破壊されるものである
技巧に於ける完成は作者の徒勞に終る場合が多い。この點より論じた彼の川柳は亦何云ふ素張しさであらう。次に示す句なごにみる彼の洗練された技巧は彼の人生觀と相俟つて異様に輝いてゐるではないか。

氣まぐしてははつきり生れ落ち
死ぬ事を知らしてやつて何になる

ユーモリストより見た彼の川柳は、彼の温健な、快活さが遺憾なく表れてゐて面白い。

暮れ方を親爺と違ふ氣で仕舞ひ
女店員の外に三人鹹首になり
皆賣つた後に片意地だけ残り

平面描寫即ちスケッチ川柳における彼は、全く凡庸作でないか。

ない。それは彼が單純なるスケッチ川柳を避けてゐる結果であらう彼の句にスケッチ川柳の影が段々少くなる現象は彼の爲めに喜ぶべきである。總じてリズムを尊重し彫刻的句作に精進する彼の川柳には、かけ離れた無駄のない事だ。しかし練磨さ苦心によつて生れた句の中には、内容の幼稚さから来る鼻持のない句がある事を發見した。自己に對する極端な信念は作家に於て或場合不幸である。彼自ら自惚れてゐる句の内第三者に嫌惡を催さしめる句を擧げてみやう。

話し合ふ案外左傾してゐる僕
一粒のその米からも白い水
事實上自殺してゐる人の群れ

要するに路郎、日車、半文錢氏に、無形の薰陶を受けた彼の川柳は最近その敏才と相俟つて益々異彩を放つて來出した。唯彼のために恐れる事は彼のあまりにアート、フオーア、アート視する事だ。あまりに廻り道する事である。そしてあまりに感激のない事である。この調子で進んゆけば憂鬱なジレンマに陥りはしないかさういふ危惧である。もう少し狂奔的であつても無駄であるまい。徒らに内容的になるなけれ。理智的になる勿れだ。もつと感情的で、空想的で、浪漫的であつてもいゝわけだ。我々はたまには、ウエトレースの媚笑に血を湧かしてもよいではないか。

(をばり)



三日路雜記 (一)

— 古俳句と川柳の類想其他 —

木村半文 錢

古俳人の句集を讀むと私は、こきく、私共の川柳と、それらの俳句との表現法や思想の相似點を認めます。等しく十七音の律格をもつ短詩として、さうした類想や同じ表現の手法があるのは、時代こそ百年も二百年も隔てゝゐるても、其處に日本人としての、同じ日本語に成る短詩としての避け難い處があるのであらうと思ひます。それらに就て二三の氣附いた點を書きこめて置いたのを、今少し感想として發表する次第です。

五月雨をあつめてはやし最上川
幾筋も降つて一つに雨の音

日芭 蕉 車

芭蕉の句は、最上川のさうくとして流れる様を「五月雨をあつめてはやし」に直觀の強調となつて居ります。日車氏の作品は無論一見した處で全然違つた内容を持つて居りますが、私は芭蕉の「五月雨をあつめてはやし」に理智的に表現せられ

たのも、日車氏の「幾筋も降つて一つに」の同じ理智的傾向を有意味に味はひたいと思ひます。尤も「最上川」の句は雄大であり「雨の音」の句は寧ろ靜寂に近い感じを與へて居りますが其の表現せられた焦點的手法は、共に齊しい傾向を帯て居ります。そして前者を男性的とすれば、後者を女性的と見る事も出來やうと思ひます。いづれも上五、中七の少くし懷疑的に、詩としての餘韻を残してから「最上川」「雨の音」と同じく強く一句を纏めてゐる點、共通した手法であらうと思ひます。

名月や今宵生る子もあらん
月はけに一夫一婦の枕許

信 徳 半文 錢

私の句は初めに「名月や」に冒頭に於たものでありますが、何うも落ち着き兼ねるの三日車氏に相談してみても、同氏も適當な言葉は無いが名月やは熟考の餘地あらうとの事で私自身も

二度許り訂正して漸く「月はけに」も多少理屈染るが上五に据へた譯であります。然し未だ熟考してゐるのので今後この上互に適當の文字を當て筈める迄、これを已むなく發表した次第ですが、この兩句は不思議にも、月明の清夜に對する人間の倫理觀を表現したもので、信徳の句は「生るゝ子」に對して私の句は「一夫一婦制としての道德」を同じく月の美しさに感じた現れであります。殊に私の句が「名月や」も三五を固守してゐたら殆ど信徳の句も類想に近いものになります。が全く不思議な暗合だと思ひます。

おころへや齒に喰ひあてし海苔の妙
行水や何にこゝまる 海苔の味
働けばこれや淺草海苔の味

芭蕉
其角
半文錢

私の句は、前二俳句の名作に比しては、ズツと含蓄味に乏しいですが芭蕉の老後の齒に喰ひあてた「海苔の味」の淋しさに反對の立場に置かれた勞働後の「海苔の味」には不思議にも人間としての、年齢の隔たりや、環境の相異に依つての特別の事情以外に、共通した感情が流れてゐるやうと思ひます。たゞ芭蕉は「砂」を實感して見せて呉れたのは、我々川柳家の注意すべき點であらうと思ひます。其角の句は其の點で餘程内容を異にしてゐますがその「行水や」以下の表現法は、たしかに「人生」を詠まうとする私共に、一つの暗示を與へた作品であらうと思ひます。斯うした三句の妙味（私のものにも多少は妙味がありません）は、人間としての感情の共通點に立つてゐる概があらうと思ひます。次に

青海苔も和光の塵のひもつかな 許六
がありますが一和光の塵を見出した許六の才分を驚異させなければならぬでせう。許六で思ひ出したのは

鬢の霜は無言の時のすがたかな 許六
一句ですが、この句を見出した時に、私の近作
積崩す時鬢髪に風をうけ 半文錢

を、取消さうかと思つた位、許六の句に惹きつけられました。殊に、許六の句の觀念や覺悟は私の今日の生活には現はれない點であらう、と思ひながらも、等しい人間としての惱みを味ふことが出来たのであります。そして許六の句は人間としての完成に近いものであります。私はその道程を今日以後に歩まねばならぬと思ひます。併し、こうした共通した感情は日本人としての鬢髪の黒さ白さに依る特異な所として微妙な驚異であらうと思ひます。その點で、許六の句は私の句よりも十年以上の老ひを感じさせられる句であらうと思ひます。それだけ私の句に未熟さがあり、伸び行く未來があらうとも切に感じるのです。

鹽鯛の齒莖も寒し魚の店 芭蕉
一荐り齒莖に泌る齒磨粉 半文錢

全然太刀打ちも出来ない程に、芭蕉の句も私の作品に隔たりの見せてゐますが、その表現の緊張味には一脈の生命を共通さしてゐるのです。敢て「齒莖」といふ文字が何れも用ひられてゐるこいふ、單なる理由以外に、芭蕉の客觀的主觀の私の句の主觀のものには、共に感性の上に隠し切れぬ同じ色が流れてゐるのであります。

あかく三日はつれなくも秋の風
ボケットの底から街の秋の風

芭蕉
半文錢

俳句三川柳の相異點は斯ういふ處にあらうと思ひます俳句は飽く迄直観と感情に主座し、川柳は『ボケットの底』といふ想像世界に奇智を現はすところ、同じく『秋の風』に對する作品ながら俳句は事實上、川柳は事實化して行く上に相方の表現法は互ひに譲らぬ焦點を擲んでゐると思ひます。尤も句の價値は到底私の川柳が比較にならぬ事は申す迄もありません。

稻妻にさくらぬ人の傘さよ
欠伸するその人格の大きさよ

芭蕉
日車

この二句にも、川柳三俳句との、相侵し得ぬ一點の境界を保つて居る事を肯づきますが、之なきも内容を嚴密に——と言ふよりは、語感の鋭い人であれば直に其の兩句の等しい持味を觀取するだらうと思ひます。右の二句程にも類似はしてゐませんが表現法の上で、こゝういふ同じ様な人生觀があるのは、左の二句です。

花に風かろく來て吹け酒の泡
飯さなり煙は空へ一筋に

嵐雪
半文錢

素材は違つて居り、表現法も全く違つて居りますが、これらは同じ、もの、感じ方だと思はれます、嵐雪で思ひ出すのは辭世吟

一葉ちる咄一葉ちる風の上
であります、この『咄』の一字の妙味を川柳家も味はひたいと思ひます。この一字があるために、いかに嵐雪の生涯が、そ

の最期にまでも引きしめられてゐるかの微妙さであります。立派な辭世吟だと思ひます。

初秋の心動きぬ繩すだれ
酒さめて疊の上の秋を踏む

嵐雪
半文錢

この兩句も共通した感情の現はれが窺はれます。そして左の

人生の今は霜月なかば過ぎ
は稍々抽象的ではあります、同じ程度の哀愁が窺むものと思ひます。

貧乏に追ひつかれけり今朝の秋
貧乏をきつかり聲に敷て酒

蕪村
半文錢

『今朝の秋』による俳人蕪村の貧乏觀ミ、貧乏そのものを直覺する私の貧乏觀ミの良いコントラストであります。私は、私の句の下の『酒』を廢して、いつそ『こそ』と變へやうかと思つたりしてゐますが、まだ私の酒好きか酒に捉はられて、其處まで徹底せぬのであります。拙句の追ひつくミ秋だ眞ツ直ぐな道

の如きも類想の部に這入りませう。

春の海ひねもすのたりくかな
石一つ投げたミころも海の涯

蕪村
半文錢

俳人の自然觀ミ川柳家の智性に惚へる點を對照して見るべしであります。これは類句ミ言ふのではありません。同じ海に對しても、俳人ミ川柳家の感じ方の相異點を例に擧げたのであります。

こもし火を見れば風あり夜の雪
ろうそくを灯せば風のあるものよ
灯の揺るゝが風の姿也

蓼 太
日 車 郎

俳人として蓼太は、同じ『こもし火の風』を捉へて居ります
が既に『夜の雪』に獨得の情趣を加味して居ります點、川柳家
の直観より來る智性の閃き、明確に川柳俳句の分時點を示
して居ります。併し、斯うして蓼太の句を見る時、先人の思想
の落着き、近代人の日車氏や麥郎氏の思想の片鱗を、時間的
に味はう事が出來ます。日車氏自身も言つて居られた同氏の句
酒少し飲めば淋しくなるものぞ

も芭蕉晩年の句

酒のめばいこゝ淋しき夜の雪

に比較するに、人間としての年齢の積り積まぬでその思想の老
熟否を肯きたいと思ひます。尤もこの『淋しき』は或は小
生の記憶違ひか分りませんが其の點は間違つてゐたら『眠れぬ
』だらうと思ひます。日車氏の句は原句は『なるものか』であ
つたのですが、年と共に『ぞ』に改められたのは蓋し其の進境
の上に於て意味は深いものがあります『ぞ』と『か』の輕重を
お互に味はひたいと思ひます。

次に私は左の句

秋深き隣は何をする人ぞ

芭 蕉

を非常に愛誦して居りますが、その結果でも言ひますかさう
した境涯の句を時々得る事がありますけれども、何うしても芭
蕉の句の深さには達しないので、いつも長三嘆をしてゐる次第

です。

冬なれや壁をつんざく孤々の聲
壁一重心貧しき人々よ

の二句がありますが、奥行のないのは吾ながら愧づかしい
思ひます。併し、死ぬまでには立派に芭蕉の句の以上のものは
出來ぬにしても對境のものを得たといふ願つて居ります。殊に
秋深き彼のきざはしを歩一歩

の拙句は實に芭蕉の句に近づかんとする、私の發奮の表現です
この歩一歩の最後に私の思想の深潭味をものしやう、實は切
望してゐる次第です。

死にもせぬ旅寢の果よ秋のくれ

見送りのうしろや寂し秋の風

同 芭 蕉

に對して、私は未だ幾多の苦行を積まねばならぬことを覺悟
して居りますし、その上に私に左の句は、尙ほ私に長き將來の
『生』を得べき豫感もあります。

秋を手に握つた時の血のきはひ

半 文 錢

私の句はリズムの上に頓化した處はありますがこれが『血の
きはひ』を、もつゝ妥當なものに發見して行く順路であります

名月や門にさし來る潮頭

芭 蕉

芭蕉去つて一列白き浪頭

半 文 錢

芭蕉の潮頭といふのが、或は眞實であらうと思ひます。が潮
のさしくる先端、さしくる潮の上部の浪頭、言ふことは、言
ひ得ないでもありません。多少苦しいですけれども……右の句
は全然句意は相違しますが、芭蕉以後の芭蕉觀として、何んだ

か因縁が窃むやうにも思はれます。

菊の香や奈良には古き佛達
刻み行く業火の中の佛達

芭蕉
半文錢

『菊の香』『奈良』『古き』『古き』『いふ感じのよい言葉に依つて、
いかにも『佛達』を美化してありますが私の句になるまで全く相
違してゐて同じく美化して、も智性の冷たさを何うする事も出
來ないと思ひます。矢張り俳句は感覺的で川柳は理智的であら
うと思ふのであります。

山路来て何やらはかしすみれ草
雜草の中に一本ひよろこ立ち

芭蕉
半文錢

苔の花ものゝ命は一分たち

同
芭蕉

芭蕉の句は、飽までも自然の『すみれ草』を直観して居りま
すが、私の句は矢張り幾分の解釋らしい觀念がつき纏ふので、
純情そのものを表現するよりは、川柳としての特質たる智性の
感情化になつて居ります。類句ではありませんが類想たる智性の
のでありませう。其の對象に自己の感情を移入する點に於て
同じやうな思想に立つてゐる句ではないかと思はれます。さう
いふ意味で私は次の二句を、矢張り『閑寂に置かれたる境地』
として類想(廣義の)ではないかと思ふのであります。

古池や蛙飛び込む水の音
三月も下旬一個の石の前

芭蕉
半文錢

共に冥想に耽つてゐる共通の、ある淋し味を窺ひたいのであ
ります

名月に籠の霧や田の曇り

芭蕉
半文錢

名月の花か三見わて綿鳥
冬の月恰も人の胸に擬し

同
半文錢

俳句は何處までも實感の表現であり、川柳は飽くまでも智性
の表現である事は右の句々で分らうと思ひます。これは類句や
類想といふのではないが、川柳でも『冬の月』は吟誦し得ら
れるものである事を、一寸斯うして吹聴して置くだけで他意あ
りません。前句に比しては次の句

手に取らば消のん涙そ熱き秋の霜
路次十年心に霜の置くが見え

芭蕉
半文錢

稍感傷的態度は同じ傾向に陥つて居ります。それで芭蕉の清
貧、私の赤貧は譬のべき様もない程人間としての貧乏に隔
たりを持つ事は當然でありますが、併し其の貧乏に處する覺
悟の上で、同じやうに一種の諦觀をもつ事は、偉人なる芭蕉と
貧弱なる半文錢との差はあつても、人間としての感情には、さ
しての隔りもないのであらうと思はれます。飯を食ひ、茶漬に
親しみ、香のものに生活の共通點をもつ日本人としての特性で
あらうと思ひます。芭蕉は

野ざらしを心に風の 秘む身哉
感傷氣分に浸つてゐますが拙句

風去れば心に描く森の音 (原句心吹き抜く)

にしても同じ境地の惱みを捉へたものであります。

米買ひに雪の袋や投頭巾
米くるゝ友をこよひの月の容

芭蕉
同
半文錢

米櫃の蓋取る度の露命也

同
半文錢

清貧か冬の日脚の傾きて

同

裏の戸を開けても冬の日脚也
芭蕉の貧乏の餘裕も、私の餘裕をもたうとする蕉心の反面も
は好コントラストを現してゐませう。併し左の句

奪けれ飯の白さも貧しさも 半文錢

の感じは、聖芭蕉の心のドン底にも流れてゐたであらう。こ
思はれます。私の人格が完全に磨かれましたら、この『奪けれ
』は生きた句になります。今では何んだか反抗氣勢のやうに見
へますが、未だ私の人間性の不熟に因るころであります。

門松の針にうつらふ日の光 半文錢

芭蕉が完全なる人間の感性を唱ふてゐるのに比べては、私は
未だ『松葉の針』に日の光を移したに過ぎないので、私に
るべきは人間の感性と智性であります。殊に私の句から針の鋭
敏性を失はぬと、人間としての餘裕ある堂宇へ入寂が出来ない
のであります。

雲も隔つ友かや雁の生別れ 芭蕉
父こなり子こなり空に隔つ雲 半文錢

これらも微かに類想としての、同じものゝ感じ方でありませう
夏衣いまだ風をさりつくさず 芭蕉
冬を背にわれそこゝに庭に立つ

では、既に近代的の焦燥氣分が離れてゐませんかから『達観』こ
いふ點には到達が出来ないと思ひます。故に芭蕉は左の句の

草臥れて宿借る頃や藤の花
？、自然境に到達して、安心の胸を撫で下してゐますが小生

は、まだ
生活のインキも残り少なけれ

ミ、悲觀状態に陥つてゐるのであります。研究事項が少し餘
談に亘つて恐縮でありました。別に拙句を示して芭蕉の尊嚴を
傷つけるのでありませんが、人間としての磨かれて行く経路が
芭蕉の句と私の句とで對比されたらば甚だ幸であるのです。
(つづく)

新興川柳詩集創作正誤表

頁	誤							頁	正			
	6	84	111	152	154	191	200					
1	なつ逃	ケンセント	倉光唐四郎	金か	三馬	役空	2	赫し合ふ	4	閉ちる空	3	赫し合ふ
1	なつて逃	ピンセット	大塚三拍子	金が	三馬	役立つ	1	赦し合ふ	1	閉ぢる空	1	赦し合ふ

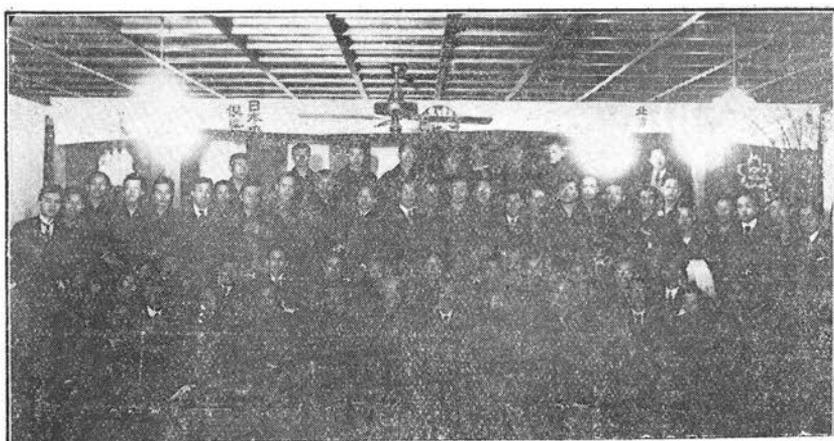
序文 12行 五呂氏八(誤) 五呂八氏(正)
 後記 413頁 八行 上川日車氏(誤) 川上日車氏(正)

新春川柳大會

一月二十日夜
於日本橋俱樂部

大正十五年(一九二六年)に一步踏み入るや、柳壇益々盛ならんことを風潮著しくなつた事は喜ばしい限りであります。この時に當つて開催された我社主催の川柳大會は誠に意義のあるものであります。當夜の珍らしい顔ぶれでは、京都對照川柳社の幸男、同じくさいころ川柳社の紫明氏、同じく京都の大管文錢氏、新に本社同人ミなつた畫家伊藤彦造氏、その他では神戸の紋太氏、同神戸の枝呂氏など遠方よりの參會者多數にて盛會を極めました。まづ席題互選「襯衣」が馬行氏に依つて披講さるゝや「頂戴」「頂戴」佳句の續出に益々緊張の度は加へられ。次いで席題「洋装」紋太氏選、「抵當」松郎氏選の出題あり、この頃尙參會者續々あり、遂に六十餘名を算しました。やがて席題を締切り。馬行氏の紹介にて主幹麻生路郎先生登壇「柳壇の將來」なる演題の下に柳壇の過去より現在に及び延いて將來の柳壇に就いて、詳説する所あり。最後に我々は飽迄詩人たたらざるべからず結び。約五十分になつたる熱烈なる講演は終りを告げ拍手裡に降壇。次いで紋太、松郎兩氏の席題選、路郎氏の兼題選の發表あり。午後十一時盛會裡に散會いたしました。尙當夜吉岡鳥平諸伯より個人選大位に氏の彩筆になる色紙の寄贈あり。「十日戎」は京都の紫明氏「大文字」も矢張り京都のさちを氏、「道中」は大阪の飯山氏「それ／＼持ち歸られました。尙出席者全部に對して同人萬よし氏より張子の虎七十個の寄贈あり。共にこの處より深謝する次第であります。因みに當夜の參會者は左記の方々でありました(二柳子記)

路郎、紋太、幸男、紫明、彦造、藤堂卓、卯之助、蓉、悠々、三巴、長人、波郎、双柳、夢路、碧樓、クラブ、蕭流、乾坤、助六、三次、山月、文久、越浪、二葉、突支坊、枝呂、廣賀、子行、花磨、春莊、塊人、万よし、屏三呂、一路、南枝、太閤、飯山、一文字、秀哉、市壽、花月、しげる、開路、百雷、天平樂、三平、彩秋、啄舟、史期、多聞、白帆、ひろし、白澤、信かず、文錢、悟郎、声穠、英豆、月兔、かほる、籬翠、松雨、刀二、松郎、馬行、二柳子、祝電、柳路、史風



兼題 恩 人 路 郎 選

恩人の息子を置いてある二階 飯山
 風の如く恩人はもう辻を折れ 悠々
 恩人は遊んで飯を食ふてゐる 春莊
 恩人ミ来た圓山はこのあたり 一路
 恩人へ出す座蒲團は盛り上り 啄舟
 恥かしい暮しへ恩人留守に来る 三平
 恩人ミ笑びの中できみかわし 太平樂
 恩人に見忘れられた面白さ 塊人
 落ちぶれてから恩人も打忘れ 文錢
 恩人は昔のまゝのなりで逢ひ 波郎
 恩人へ今の身分を詫びてゐる 憲翠
 秋來れば恩人の家煙が立ち 爽豆
 恩人を訪へば障子を張り給ふ 三巴
 恩人にそむいて路次に二人住み 同
 (人)恩人はまさの時の金を呉れ 刀三
 (地)恩人に繁昌ぶりを見て貰ひ 馬行
 (天)恩人を忘れる程の運が向き 紫明
 (軸)恩人であつて思ふ四十過ぎ 路郎
 恩人を持つ極道の息子にて 同

席題 襯衣 互選

襯衣を脱ぐ同志の話雪になり さら
 納襯衣を脱ぎはち切れさうな肌 月兎
 刑事の手襯衣のポケットへ届き 聞路
 病人に時候はづれの襯衣を着せ 三次

ぐつこ手を背へ廻し襯衣を脱ぎ 春莊
 元氣よき襯衣一枚でいちびつて 廣賀
 汗のシャツ首から入る風を知り 多聞
 貧乏に追はれた中の白襯衣 屏三呂
 殿りもシャツ一枚でたぎり着き 二葉
 叩くシャツがだんく値が下り 花月
 襯衣の袖氣になり乍ら火に當り 双柳
 末席で恥しそうな白いシャツ 穂蘆
 物干で襯衣一枚がしやちこ張り 碧樓
 兒は毛糸親仁は綿ですきシャツ 突支坊
 ツイシャツの腕かき上げた忙しき 一壽
 お妾の世話で子供の襯衣を着せ 太閣
 級長はシャツ着ぬ事を自慢なり 萬よし
 飯人の今日新しい襯衣を着て 越浪
 肩こらぬ襯衣を通すも三ヶ日 太平樂
 泣かして来た子へシャツの小さき 三平
 雜賣屋シャツの縫目はこの通り 一路
 襯衣だけの子供呂屋でつかず 山月
 襯衣だけになつて日向の影動く 文久
 袖口も失業と云ふ襯衣の色 塊甘
 眞つ白なシャツで丁稚の定休日 枝出
 シヤツを着て寝る女房早く起き 花麿
 關取の襯衣伸びる事く 助六
 見違へる細さなつて襯衣乾き 同
 力石負けぬ氣のある襯衣を脱ぎ 同

醉^さ來てシャツの白^{しろ}が目立つ也 飯山
襟足の奥にちらり赤いシャツ 同
シャツと下駄揃^{したぞろ}丁稚年^{ぢやひねん}を待ち 百雷
あやしつゝ手^てに^にの襯衣^{しんい}持^も 同
首吊^{くびだ}の着てゐる襯衣^{しんい}の新しく 一文字
着古^{きやうこ}してシャツの大^{おほ}ボタン穴 同
シャツを脱ぐ手へ誰^{たれ}が突當り 紫明
丹前^{にげん}を着たワイシャツは踊り 同
襯衣を脱ぐ暇も震ふて貰風呂 乾坤
一枚の襯衣にはつきり冬を知り 同
新らのシャツ冷水浴をする氣持 刀三
メリヤスのシャツで恙^{さし}のない養子 同
草^{くさ}疲れてぬぐ襯衣^{しんい}の手の長い^{なが}しける
話^わ途切^てらせて素早くシャツを^を 同
赤ん坊^{あかぼこ}のシャツ一枚を可笑し^{わら}し 南枝
縞^{しま}のシャツこれも大きく見^み也 同
貧弱^{ひんじやく}な亭主^{ていしゆ}を連^つぎシャツを買^かひ 馬行
キユ^{きよ}ーを持^もつ汚^{よご}れ襯衣^{しんい}が伸び 同
イヨ^{いよ}ー襯衣一枚で警^おかせ 史朗
荷車^{かぐるま}の歸りのシャツの冷たすぎ 同
家族風呂^{かぞへふうりよ}ラタダの襯衣^{しんい}を寒^{さむ}う^う かほる
シャツを脱ぐ時^{とき}にあ^あ骨^{ほね}を見^みせ 同
仕舞^{しむい}風呂^{ふうりよ}シャツを小脇^{こわき}に去^いに 夢路
襯衣^{しんい}を脱ぎ^ぬ壁^{かべ}に突^つあたり 松郎
後朝^{ごあした}の寒さを白^{しろ}い襯衣^{しんい}を被^かる 同

醉^さるるシャツを^をせに家内中 悠々
汗^{あせ}のシャツ女房^{にようぼう}の力借^{ちからせ}りて脱^ぬぎ 同
呑^のむ癖^{くせ}に襯衣^{しんい}一枚を買^かひしぶり 路郎
襯衣^{しんい}一枚で書^かいた勞働^{らうどう}運動^{うんどう}史 同
席題^{せきだい} 洋^{やう} 装^{さう} 紋^{もん} 太^{たい} 選^{せん}
洋装^{やうさう}で波止場^{なみど}の風^{かぜ}を受けて待^{まち}ち 廣賀
二等車^{にとうぐるま}に洋装^{やうさう}二人^{ふたり}ゆたかさう 山月
洋装^{やうさう}の方が^がわ^わわ^わミプロマイド 聞路
洋装^{やうさう}が手^て輕^{かろ}う本^{ほん}を抱^{かか}りて出^で 子行
洋装^{やうさう}が自動^{じどう}車^{くるま}までの雨^{あめ}にぬれ 一路
洋装^{やうさう}の母娘^{ぼにやう}人^{ひと}目を惹^ひいてゐる 春莊
洋装^{やうさう}へおんなじやうなお友達^{ともだち} 飯山
洋装^{やうさう}の目に飽^あき足^{たり}らぬ男前^{おんな} 双柳
洋装^{やうさう}に胸^{むね}の廣^{ひろ}さを見^みせられる 輝翠
洋装^{やうさう}で來^きてちよ^{ちよ}こさいな藝妓^{げいぎ} 夢路
洋服^{やうふく}のまんま炊事^{しじ}の下駄^{した}を履^はき 太閤
洋装^{やうさう}は子供^{こども}抱^かくは見えぬなり 南枝
洋装^{やうさう}をして婚^{よめ}はん^{はん}に惚^ほれてゐる かほる
夜會服^{やかいふく}勿^な振^ふつて花^{はな}を受け 枝呂
背^せ中^{ちゆう}まで白粉^{しろこな}が要^いる夜會服^{やかいふく} 同
(秀)洋装^{やうさう}の中^{ちゆう}に交^まつて手^てを重^{おも}ね さちを
(軸)洋装^{やうさう}で思^{おも}ひがけない狎妓^{あひぎ} 紋^{もん} 太^{たい}
席題^{せきだい} 抵^{たい} 當^{たう} 松郎^{そうらう} 選^{せん}
無^な抵當^{たいたう}連帶^{れんたい}人^{ひと}で暇^{ひま}が要^いり 紫明
抵當^{たいたう}を置^おきおだ巻^まきを馳走^{ちしゆ}され かほる

抵當^{たいたう}に入^いれてしまつて旅心^{りょしん} 文久
抵當^{たいたう}に當座^{たうざ}の難儀^{なんぎ}救^{すく}はれる 乾坤
抵當^{たいたう}借手^{せくて}の顔^{かほ}を見^み比^ひべる 太平樂
抵當^{たいたう}云^いふこころでなく預^よけきき 馬行
心安^{やす}だてにふこころを出^いで擔保^{たんぽ} 莢^{えい} 豆^{まめ}
抵當^{たいたう}の苦^くしまぎれに何もなし 夢路
抵當^{たいたう}のまだあるうちは迷^まつて 月兔
抵當^{たいたう}の屋敷^{やしき}今年^{ことし}も梅^{うめ}が咲^さき 多聞
親類^{しんるい}にそむき擔保^{たんぽ}に書き入^いれる 悠々
抵當^{たいたう}の事^{こと}も云^いへず今日^{けふ}も留守^{くわうしゆ} 助六
抵當^{たいたう}に惚^ほれて臍^{へし}線^{せん}の出^いしちまひ 白澤
電話^{でんわ}まで入^いれてゐるこは見^みと店^{みせ} 路郎
傳來^{でんらい}は抵當^{たいたう}に來^きて偽^{いつはり}せこ知^しれ 万よし
女房^{にようぼう}を抵當^{たいたう}にしてまだ勝^かたず 同
抵當^{たいたう}にくやしい値^ね打^うけられる 紋^{もん} 太^{たい}
抵當^{たいたう}の蓄音器^{じやくおんき}さ可笑^{わら}しが 同
(人)抵當^{たいたう}に入^いれたを養子^{やうし}引冠^{ひきかん}り 路郎
(地)抵當^{たいたう}を持^もつて來^きたので吐^はき 夢路
(天)抵當^{たいたう}に入^いれないのは干菜^{かんさい} 飯山
(軸)鬱^{ふさ}金^{かね}木^き綿^{わた}の中^{ちゆう}が抵當^{たいたう} 松郎
尙大會^{じやうたいかい}終了^{しゆうりゆう}後^ご、島^{しま}の内梅園^{うちうめいん}にて同人會^{どうじんかい}を
開^{ひら}く。出席者^{しゆじやく}十二名路郎^{らうらう}主幹^{しゆかん}を中心^{ちゆうしん}に談
論^{だん}風^{ふう}發^{はつ}。愉快^{うたかた}な會合^{かいごう}であつた。敬會^{けいかい}午後
十二時^{じふにじ}。(幹事)

遅日莊柳談會 (第一回)

東京を夜行で立つて、七日の朝歸鳴した。第一回柳談會には私が何か話す約束をして

おいたが殊に眠むれなかつたのと、旬日餘りを旅にあつて俗用で忙殺されてゐたので、これさいふ面白い話をみつておく間がなかつた。それで東京で忙しいうちに會つた柳路久良岐、信子、雀郎、劍花坊、維禰樓の諸氏のこゝろを雑談的に話した。出席者は吐露樓(神戸)二柳子(大阪)しげる(大阪)馬行(豊中)刀三(大阪)松郎(大阪)莢豆(西宮)ひろし(大阪)の諸氏に、葎乃を私を加へて十人だつた。數は比較的少なかつたが粒は揃つた。雜詠數句を課して、句の研究をすることにした。吐露樓氏は所用のために日没に辭去された。夜に入つてから頗ぶる無遠慮なしかも熱烈な句評を交換してお互ひに獲る所が多かつた。

研究方法は從來の型を破ぶつて、一人宛宛るしに批評して行つた。誰の句ですと發表してその人の句を全部一讀して、それ等の句對して忌憚なき批評を加へて行つた。この

方法は全くい、方法であつたが、多少でも遠慮をしたり、又個人的に不愉快さをあせに殘すやうな人々の間には不適當であると思つた。それだけこの日の柳談會は成効したさいふこゝろ出来る。しげる、ひろし兩氏は十時ごろその他の諸氏は十二時ごろまで話し込んでゐた。久振りに戀人にでも逢つたやうなうれしさを味つた。(遅日莊主人)

ほつねんこして素晴しい金儲け 吐露樓
見に行けばたつた丸羽と居ぬ雀 しげる
床の間に忘れものとも見える箱 同
友を待つ二階に小さい藏の窓 同
煙突のさきが怖くて何んこする 刀三
病氣かっこつちは笑ふ男なり 同
ペン皿に此頃家を明けやらし 同
花の咲く夕を家主訪わる 同
女から喧嘩を賣つた金の事 同
額縁が墜ちて來さうで家に居ず 同
父親の短氣も聽て俺のもの 同
襟垢をぬす氣なる靜りさよ 同

金持たぬ夜店に埃りばかりなり 馬行
風邪たかか聞と一こり友の來す 同
おらぶれてゐるさか聞と儘二年 同
拔擢のまだその上に嫁を呉れ 同
青樓の庭虫が鳴くこは嘘のやう 同
陽が暮れた頃から風が上りだし 二柳子
干物が乾くまもなく暮れて來る 同
心の干くこゝろは家賃が溜つてる 莢豆
土に間へ牛の働氣が知れる 同
峰の雪旅立つ心そゞろ也 葎乃
産ませ産も果かなくなりも蛾よ 同
植木屋の隣りへ住んで少し植へ 同
ひこの懐ろを當と少々腹が立ち 松郎
物云はぬ夫になつて終ふなり 同
あいつにも困らぬさか風呂へ行き 同
賣聲のわからぬ儘に泊り客 同
あれでいゝこゝろがさう話合し 同
隣から女が來れば冬が逃げ 路郎
その夫婦へ三味弾いてゐる 同
博士は死んで妻の長唄 同
向三月の柳談會は編輯記へも書いておいたやうな都合で休みます。四月からは毎月
罷します。(幹事)

漫春なれや

柴谷柴舟

(A)

令嬢「花や放しておやりヨ」、下女「お嬢さま表には穢ない犬が澤山入りますのよ。



『下女』お嬢さま自然の胃潰は何のこゝでございます。令嬢「何んでもいゝから離しておやり。』下女『ハイ〜』

オホ、それ
に旦那様がエ
スは一系のテ
リヤだからメ
ツタな犬は
……』

令嬢「いゝか
ら放しておや
り、此のいゝ
日和に血統の
爲めの束縛は
自然の胃潰ヨ

川柳書架 (十六)

井上信子句集

(白石維想樓編)

▲現代川柳家叢書の第一編である。巻頭には雉子郎、信子、維想樓、三氏の序がある。今、雉子郎氏の序文の一節を抜いて見る。氏は次のやうに述べてゐる。

(前略)自分の句集が、一部に装幀されて出版されやうなさいふこは、桶らくで信子氏自身にしては、思つても見ぬこゝであつたらう。私の知る十餘年の間に、川柳界の表面へ、自己こして、現したこゝを見なかつた。絶えず、かけにあつて、見ぬないこゝに盡してゐられた。(中略)

この句集を手にする人々のために、句を通じて作家を見、作家を通じて句を味はふ益のために、私はほんの素描ほきにも足らない信子氏に輪廓を書いたが、選まれた句そのものに就しては、私は、生なか吹々する必要がない。(下略)

▲大正十五年一月二十日発行。菊半截八一頁。定價七拾五錢。發行所は東京市外杉並町馬橋原五四七柳樹寺川柳會。

▲井上信子氏は井上劍花坊氏の夫人であるが、劍花坊氏の一家をなしてゐる。信子氏の句集には女として、母として苦心境を自由に表現した句をもつて満たされてゐる。一讀をのぞむ。

(B)

夫「オイ何んだ〜」妻「貴郎、ちよいといらつしやいよ。」妻「跡、よお吸物に入れやうと思つて」夫「跡、の取つた跡を見たこゝが有るのかい」妻「イイエ」



夫「なあに、構まうものかアハ、。」若い男も若い女。あ、世は春なれや。がチガツテヨ、嫌ですよ、そんなに堀つては跡が生ねなくなるぢや有りませんか」

夫「研究心のない奴だ

千五百年の

謎を、トク爲

めだ一寸堀

つて御覽。

.....

妻「それは塔

明治時事繪川柳

(當百水府勝平鳩甫共著)

▲本書の巻頭には當百、水府兩氏の自序がある。その一つを例によつて抜く。自序、寸鐵人を刺す底の痛烈な時代諷刺は短詩、型の川柳が最も勝つてゐる。中略(由來時事吟は、所謂不易でなく滿行の者で、其當時に於て、非常に興味を惹いたこと、又一字一語が、當時に於て深甚の意味を含んだものであつても、時間の経過に従つて次第に薄れ忘れられ、甚しきは説明尙不解に陥るものさへある。本書選集に當つて、此等の點は随分考慮を拂はれたのであるが、矢張り遺憾の處の尠くないのは止むを得ぬ。若しこれ故廣瀬勝平諸伯の飄逸な、小寺鳩甫諸伯の輕快な筆致に對して、我々の句の見劣りするに至つては實に慚愧に堪へぬ。

大正十五年初頭 西田當百

▲大正十五年二月一日發行。四六版一九二頁。定價一圓五拾錢。發行所は大阪市東區横堀二丁目輝文館。

▲本書は大坂バツクの時事吟から輯めたものであるが當百氏もその自序で告白してゐる通り時事吟の多くは生命が稀薄であるから見おべき句が少ない。當百氏の句よりも水府氏の句の方に川柳的のものがある。これは時代の接近してゐるせい以外に水府氏が曾て社會部記者をしてゐた關係上材料の取扱ひ方に巧妙なものがあつたらう。觀面白くはあるが大半狂句であるのは遺憾である。



雜感

「川柳の作り方」を讀みつゝ、
竹馬居主人

(上)

つねていの嘘ではゆかぬ大三十日の夜、浪人丈けに提灯をうつて來る者もなく、炬燵裡で二柳子氏の御厚意に因る、半文錢氏著「川柳の作り方」を讀む光榮を得た。此書市場に出て一ケ年餘を閱す、佛者の説く機縁は有難い者である。明治川柳復興期に於て久良岐氏の「川柳梗概」「川柳久良岐點」あり其後小冊子の出版は随分あつたが余は殆んど手にせず劍花坊氏の大努力による「川柳を作る人」に「さむ、書架上のツンドクになつて居るに、今半文錢氏著のを一氣呵成に讀了した事は、氏の熱烈なる筆致に誘はれたものであらう乎。近時川柳詩壇に擡頭し、世人の注意をひくゞ俱に眩のき許りの出版物も踵を亞ぎ出現するに到つたのは「川柳の作り方」等の指導書の貢獻を思ふて感謝するに同時に、初心者者に與ふる書物の責任、重大なるを痛思せしめる。

限定されたページにタイムに於て執筆された氏は、腹案を遺憾なく披瀝され得ざりし事推知に餘り有て、特に現代文藝本質論に古川柳時代の思潮との握手に、運び合ふた場面の苦衷は、余も亦思ひを等しむして、將來にも研究を續けねばならぬ大懸案である。江戸文學萬能派に泰西文藝論者との間に介在して、眞に新しい川柳の光明道を拓出するは容易ならざる業である。最早川柳は江戸式の産物でないさりとて如何に外國文學にあてはめるも傳得ない、一脈の傳統日本趣味がある。換言すれば川柳の本質論が嚴然存在すべきで、一般文藝論の支配に甘むずるの要はない。此書不言不説の間に川柳特殊の地位を高唱されてあるは尤も意を強ふする、である。

管一書中引例された古句の解説に於て著者三見方を異にするものがある。多分は出版當時同好者に因り論ぜられて居るにせよ、拙稿を沒書して頂くよう、主幹路郎氏にお頼ひして、無遠慮にて禮を缺け共卒直に記してみる。幸に垂示を惜まれざる様御一讀を煩はし度い。

一月月上旬家庭の不幸に際會し二十數日の旅行をした。其間拙稿を一寸見られた卯木氏の評言は其儘はさまして頂いた。半文錢氏ご自分は更に交際がない。卯木氏ご著者は十數年前よりの御風交ミ聞く。仄て卯木氏を介し研究上の温か味を加へ度い云ふ望望願であります。

湯殿から忘れた時分嫁は出る
著者は「斯の無技巧の技巧の中に含まれてゐる眞面目なる滑

稽感を忘却してはならないと思ひます』と賞揚され、同じ湯殿の句

耻かしさ嫁 据風 呂り湯がこほれ

『その孕むでゐる有様を巧に描き出してはゐますが、ここかにわざとらしい影が付き纏つてゐる。こゝを否むわけにゆかないと思ひます』とある、此句を孕むで居る、解せられたが故にわざとらしいさか苦になるので、(卯日同感)嫁は肥満して居る。云ふ丈けであるから單なる滑稽と見做してよからう、上五の耻かしさは川柳の常套語で耻かしいから孕むで居ると言ふのは誤つて居る(卯日明)。

皮肉は遊戯であるこの見解から、新人達は川柳排斥の一項として居るが、生物學者が證明する如く、人間夫れ自體が頗る皮肉に構成され進化して來たもので、宿る思想に皮肉一種の穿ちがあるのは當然過ぎる(卯日達觀)皮肉の活用は川柳生命の一部であつて時代相の裏面を正直に、後世に残すものである。

美しさ吐られ 振りのい、女房 惚れてゐる丈けが女房の弱みなり

等の句に對し、中七の『叱られぶり』が利いてゐる、『惚れてゐる丈け』が穿つて居るこの著者の説には全然反對で『ぶり』『惚れ』なきは説明であつて穿ちではない。限定病で智覺に訴へて感興をしゆるもの頗る眞の連想を缺いてゐる(卯日私の句には斯ういふ叙法の句があるのを自覺して居ます、殊に丈けはイヤミです)。

里のない女房は井戸で桶からせ

なきも『里のないと斷つたところ』に此句の全體の穿ちを構成してゐるのであります。とあれど、寧ろ上五の爲めに考へ落ちになつて居ると思ふ、(卯日私は斯ふ言ふ妻君を事實知つて居るのてさほにも思ひません)夫れよりは女房は途中であつて沓ぬもの店先へ出ては亭主をにくがらせなきを實揚された事に頗る同感である。

情感のよりは理智的に頭を働かす事を排斥された後で 家賃より高い染賃着る女房

の一句は同じ理知の畑でも充分消化されて居る云々であるのは、余の詩境が到らぬのか大埋屈の句、狂句である三十數年前より確信して今尚ほ變らない。(卯日イヤな句です理屈も理屈大埋屈です)

古句の詩的考察は人各々の趣味見聞に依り大に相異するもの何れに是非があるかはお互ひに研究に研究を重ねねばならぬ事で、智的考察より一層難事である。最近三允氏が『古川柳評釋』を出版されたが、これを讀むでも三允氏と久良岐氏の意見には随分隔たるのある事を知るのである。尤も古句はその時代の風習好尚の上に解説せらるべきものであるが、一面應用の新味を投込む事は決して悪い事でも亦誤つてもゐない(卯日私も之れを心掛けぬではないが出来ぬので往々悶わてる)

床の軸親和ミやらが書きんした

此句の如きは古吉原の風俗詩であるから、花魁と親和に一通り通ぜねば妙趣が汲めぬ、著者は『床の軸ミブツキラ棒に』に置いたところ到底凡手ではありません』とあるが、原句は

座敷持親和ミやらが書きんした (明和)

柳樽十篇の句で、床の軸でもよからうが夫れでは當時の風俗に應はしくない。洒落本をよむでも座敷持なる言葉は隨所に出て来る、床の軸の如き生硬な文句では此名吟は生きぬのである

座敷持琴はあゝして置くばかり (明和)

座敷持小道具屋程かざりつけ (文化)

じんだ瓶持たぬばかりの座敷持 (文化)

座敷持店を追はずに床をこり (明和)

座敷持日なしを借りぬばかりなり (安永)

座敷持何か書じやくも一部見へ (十篇)

座敷持雀せ探幽をかけて置き (廿一篇)

これは『座敷持』の句の數例である。因に宮川氏の自費出版親和考は拿い參考資料である。

ぬしの手で御箸紙こかきなんし

外四句を掲げ『斯ういふ風の軽味、人生を蟬脱したやうな呼吸を通はそうにするには、さうしても其の人の境遇と趣味性の天分に俟たねばなりません。一概に此の種の型を真似やう

とするに却て軽味ではない。カルヤキの様な味の無い句になつて了ひます』とあるは至言である。久良岐翁の主張の如く古句はに吉原詩が最も多く従つて名吟が豊富なのは、今日から想像し得ない人情美の社交地帯、四民平等の共樂地帯、眞のナイトレス、ウオールドであつた活きた吉原を背景として川柳が江戸文學の一部を代表したからである。救世軍が一角に巢食つて太鼓を叩いて居る今日の人肉の取引市場と異なり徳川幕府の基礎を此處にをいたしたのは、川柳家の持つ一つの趣味的ブライドミも言へる。

腹立ちちは禿へそれる女郎の手

もちつこで螢にミツク禿の手

我よりも人に淋しい寒念佛

寒念佛みりくくこ歩るくなり

探し出す度び伸びあがる猿轡

盗人の糞を見しるる立ちのま

双方の句をほめて居られ共、自分は後者のみを採り前者は欲しない。即ち『腹立ち』の句は生硬『我よりも』は理屈『探し出す』は作意の句である。

土用干疊の上のまはり道

禿呼ややりての尻を廻り道

二句共に決して實景を活かした價値はなく、寫真味にしても頗る拙劣な者である。(卯日コンナ拙い句は柳樽には無いと斷

言は出来ぬが斷言したい句です。二十四篇迄にはありません。
十川干の句は幻氏の川柳歳事記にありました。

初節句 魚木にのほる 氣色あり
汝らは何を笑ふミ 隠居の 屁

前者に對し『多少理屈くさいところはななくてもありませんが、赤川柳の寫し方であつて一句を力強く惹きしめて居ます。後者に對し『ごくまじめに此の句を讀んでゐるミ妙にくすくすミ笑はされることを餘義なくされます。決して此句は揆つてゐる句ではありません。ただ隠居の屁があるから多少誤解はされますが超然たる隠居の 倅が充分に現はされてゐます』二句俱に文

粒々集

近 什 安川久流美

銀行の扉を神様ほほ笑まる

柳風スポーツ(四) 森 東 魚

大事のもこは外野が突當り

眞向の西日外野手チトあわて

毒殺はシヨートが球をかくしてゐる

句取である事を明言されなかつた爲め折角の説明に物足りなさ
ミ疑問を抱かせる恐れがあります。申す迄もなく謠曲竹生島(註、竹生島に用ひられたる建長寺僧自休の詩、綠樹影沈魚上木
清波月落鬼奔浪)ミ蟬丸(註、翠の髪は空さまに生ひ上つて撫
でれども下らず、如何あれなる童部さもは何を笑ふぞ何我髪の
逆さまなるがをかしいみや……汝等が身にて我を笑ふこそ逆さ
まなれおもしろしく)を應用したので、可なり好く氣分は出
された大成功句であります(卯日隠居の屁の如きは文句取りで
あつても氣付かぬ上乘の作ミ思はれます)(つゞく)

マスコットベンチコーチへ寄りかゝり

古色蒼然吉例のノックをし(呈老鐵山氏)

三振かヒットの腹でピンチ出る

スケートは尻でいろはを書くばかり

スカールのおこにほかりミ都鳥

おめさんミ云ふ程の中ダブルに出

蹴球部幔幕めいたシヤツで来る

〔大正一五、二、一八稿〕

募 集 句

人 妻

岸 本 水 府 選

人妻の箒を持ってはい、姿三次
 思ひ出は人妻さして初詣桃哉
 人妻のさす盃に見る器用月兎
 人妻のフト手が囀るゝ美少年白鷗
 人妻の淑かなごこ丈け目立ち 太洋
 人妻さいふ満話さざれさせ 逸 錢
 其後は人妻らしふ老けてゆき 杏 三
 人妻さ来て素氣なふ扱はれ 無 心
 親切をさけて人妻茶を濁し 春 莊
 人妻さ思ひ思ひの道を行き 三 平
 戀人は人妻さして喋り過ぎ 万 よし
 人妻に汽中でも會ひ二見も會ひ 同
 人妻へ思ひくゝの年を指し 助 六
 人妻に遶りはかかる世話になり 同
 わだかまり無く人妻の御冗談 隨 帖
 人妻は今本當の若さなり 同
 人妻に古い履物揃へられ 戲 多 通

蜜 柑

お供への中に蜜柑の目立つこまのほろ
 生酔は蜜柑の味を覺て居柳秀

子澤山蜜柑は盛つた方にする 光 路
 金柑のやうな蜜柑が底から出 突 支 坊

竹 田 芦 穂 選

訪ねるご細君だけで上り兼ね 同
 人妻の朧を電車の中で見る 久 流 美
 ほんごうの年が知れない友の妻 同
 人妻さ聞いて二度目の國を立ち 眠 聲
 人妻の其の言譯に義理さ知り 同
 人妻のそのひややかに青たゝみ 同
 人妻のフ、ン、ミ笑ふいゝ話 吐 露 樓
 人妻のお預りしておく返事 同
 プログラム人妻さ云ふ事が知れ 同
 選後に
 「人妻」さ「他妻」さ書き「他人の妻」さ
 いふ意味であります。もつさくさく云へ
 ば「自分より見たる他人の妻」であります
 中には單に「妻」といふ意味にしか聞こへ
 る句もありました。實際の「人妻」といひ
 得る句は僅少でありました。万よし君の
 句は出てゐない句にも「人妻」さしての印
 象がハッキリしてゐました。

川 柳 家 の 戸 籍 調 べ

□ 係 馬 行 生

- (一) 姓名 (二) 雅號 (三) 別號 (四) 現住所
- (五) 生年月日 (六) 職業 (七) 好きな句 (八) 好きなタイアの女 (九) 自信の句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 嫌ひなもの (一三) 川柳に手染めた年月

(63) 杉 村 蚊 象

- (一) 杉村翁 (二) 蚊象 (三) 轍の時代に
は、歌三二を用ひて居りましたが今は用ひ
ませぬ (四) 大阪市住吉區天下茶屋聖天山
(五) 明治二十四年三月三十日 (六) 松竹合
資社員 (七) 水牛坊、奈良武、日車、半文
錢、水府、綠天諸兄の句は好きでした (八)
昔は舞妓が好きでしたが今は甘いもの
を頂戴する方が好きな年になりました (九)
自信の句さ云ふては是ご申上げかね
ますが、作つた時は全て自信を持つて居
ります (一〇) 仕事になつてからも芝居や
映講を見るのは好きです (一一) (一二) 項
缺 (一三) 確かに明治四十二年頃さ思ひ
ます、當百卯木兩氏に教わられました。

(64) 竹 田 芦 穂

- (一) 竹田折半 (二) 芦穂 (三) 芦鳳、竹刀、
遊狸 (四) 大阪市港區八條通二丁目拾貳番
地 (五) 明治二十九年十二月廿九日 (六) 大

二等車蜜柑の皮が投げ出され 春莊
 彌次られる舞臺蜜柑の皮が飛び 南天棒
 瓜があるので夏蜜柑頼まれる 史朗
 出入から蜜柑が届く十二月 同
 蜜蜜山赤い便りも嬉しくて 無心
 園はれて蜜柑だん／＼甘くなり 同
 泣き止めばあゝ蜜柑を一つ見せ 憲 翠
 お駄賃に蜜柑を貰ふ二ツの手 閑 路
 椅子席で蜜柑をのせる膝を立て 同
 瓜持つて走る蜜柑轉け落ち 逸 錢
 夏蜜柑顔をしかめて一人逃げ 同
 人だから蜜柑喰ふてる奴もある 山雨樓
 蜜柑の皮だミ犬は知つてゐる 花 泉
 草臥た様に蜜柑の枝が裂け 一文字
 寫生して終ふ直ぐに喰ふ蜜柑 靜 雲

村長

○ 雅 幽 選

村長の娘に英語讀めるなり のほる
 村長の家だミ判る瓦葺き 吐 霞樓
 村長の屋根にアンテナ張つて 柳 秀
 村長の息子町から嫁を取り 憲 翠
 村長がいつか定期の味を知り 突支坊
 親且那村長ミ云ふ職があり 千 鳥

色の割合蜜柑の冷たすぎ 助 六
 大口に蜜柑喰ふてクラス會 万よし
 船頭が蜜柑を喰べる風こなり 同
 ほり込んだ蜜柑小猿は横ざられ 越 路
 満員の中で蜜柑が轉け落ち 無 生
 小さな手蜜柑握つたまま寝る 木 屑
 醉ふてゐる喉に蜜柑の心地よし 杏 三
 針箱の蜜柑子供を待ち侘びる 白 鷗
 蜜柑むく手許見つめて貧しい子 山雨樓
 蜜妻見る窓に詩が出来歌が出来 吐 霞樓
 おいこまします蜜柑の皮ばかり 同
 口説もせず飲まもせず蜜柑 同
 蜜柑むき／＼もう貰はれる頃 同
 暖かい手から冷たい手へ蜜柑 同
 蜜柑むく手の先冬に觸れてゐる 逸 錢

關 本 雅 幽 共 選

村長の姿も派手な文化村 南天棒
 村長が来て海軍をすゝめて居 史朗
 入營の後は村長引き受ける ト 水
 村長は保険の世話もさせられる 無 心
 村長の家も矢つ張りランプなり 靜 雲
 村長の式辭は骨が折れ過ぎる 一 枝
 村長が兎も角皆なうなづかせ 山雨樓

阪福市電氣局運輸課運輸係運輸事務員
 (七)「平凡の幸福隊」話しかけ路郎、ほ
 か川上日車氏の句に好きなのが澤山ある
 (八)「さここなく晴れやかな女足許のきつ
 ぱりした女(九)苦しんでゐるが今尙堂に
 上すべきものを持たな(一〇)野球、旅
 行、讀書、活花(一一)有(一二)友を賣る
 奴、吾子の自慢を喋々する人(一三)大正
 九年春

(65) 小阪隨帖

(一)小阪正敏(二)隨帖(三)秋莊(四)神
 戸市荒田町四丁目一五〇(五)明治四十年
 五月一日(六)銀行出納係(七)自分の毎號
 投句する各柳誌に澤山あります(八)□×
 ○?(九)句に自信の持ち方をよき方?今
 の所、持たされて行きつゝあります(一
 ○)川柳外に興味ミ云へば氣が向いたも
 の、凝る程にはなれませんが(一一)無し(一
 二)澤山あります(一三)大正十四年の
 正月。

(66) 喜田飯山

(一)喜田寛(二)飯山(三)なし(四)大阪市
 港區八幡岸町(五)九〇の二九山中方(五)明
 治廿九年十二月卅一日(六)官史(七)「羽
 衣を少し離れてせがむなり」世間亭(八)
 (九)は通過します(一〇)淨瑠璃但し聽く

地方柳壇

松 郎 編

◇常緑吟社小集

(一月十五日) 紀伊妙寺町

友訪へば机の上の置手紙 柳 柳 聲
警察の机冷たい眼が並び 無 心
試験前机を覗らむ日の多し 香 月
番頭の眠る机のおもしろさ 十 世
無難作に本積み上げる大机 子 鶴

◇節分偶會

萬よし報

足早のお化けに動く人集り 馬 行
夜遊びも今日家にあり豆を撒き 同
節分に昔馴染みの伎に出逢ひ 三 笑
誘はれるまゝにお化け一つ出来 太平樂
色町に近く節分はつきりこ 二 柳 子
豆だけを買ふて裏屋は年を越し 万よし

◇かほる居偶會(節分の夜)

氏神へ二月三日の髪を見せ 波 郎
鬼は外お化の頭越してゆき 同
盗電をして節分の宵の口 刀 三
節分は姉の日記に夜が更ける 同
節分の豆にほんまの歳が知れ かほる
節分のお化に今日の寒い風 同

◇天満偶會 (二月六日)

悟郎報

停留所かせがにやなる顔で立ち	馬 行	後押ししのおつかりはまる水溜り	啞 人
埃りの都さばよく云ふた停留所	同	後を押す女房も腹か空いてゐる	同
停留所丁稚は地圖に用があり	史 朗	後押しは自分も何か提けてゐる	一 路
停留所はて何事の人集り	十 字 路	後押しを頼んでやつこ阪を越し	二 柳 子
停留所降りて踏まれた靴を見る	悟 郎	◇天満句會 (二月十一日)	
◇事務所偶會		春雨の續きを聞かず絹蒲團	史 朗
寝返りのまだ寝もやらぬ絹蒲團	十 字 路	絹蒲團襖さつちり閉めておき	聞 路
絹蒲團博士最後の脈を取り	悟 郎	絹蒲團一人起きるこついで起き	悟 郎
晝だらう位で起きる絹蒲團	馬 行	絹衣具の中から實の母を戀ひ	松 郎
絹蒲團頭上けるこ映るなり	同	絹蒲團九官の聲頻りなり	刀 三
あつけなく身受のすんだ絹蒲團	同		

競技的のもの、よく勤ねる女の兒(二三)十四年程前、父(吉村)に連れられて當白庵の句會へ出席したのが初めてす。

(68) 林田馬行

(一)林田悦三(二)馬行(三)大流三郎、豊之助、馬の首、紅屋十八その他數種あり(四)大阪市外豊中榮通二丁目石賀方(五)明治三十五年七月八日生(六)染料商店員(七)「宜敷をまた宜敷」傳へけり、紙一重さても凡夫の淺間しき「故奈良武、一切れし日の晝の暗さを忘れかね、心太喰ふ淋しさに惚れられて」故柳珍堂、「凡人こなれ一つ捨て二つ捨て、夜具を敷く事がこの世の果てに似つ、又しても金が出しやばる消え失せろ」日車「女よりむしろおのれを弄び、人真似の出来る阿呆な烏がある、机上より一尺低き民衆よ、人生は遊戲さあ、手を繋げ」半文錢「はすみてはすまず女の真劍に、せめてもの慰め顔を寄せて食ひ、わたくしをせぬ詰襟に風を入れ」路郎、その他幸男、龍二、刀三、莢豆、故小鼓氏に好きな句あり(八)束髪で静かな従順な淋しみのある女(九)自信の句目下製作中(一〇)讀書、思索(一一)配偶なし次男なる事を聲を大にして申添わておきます(一二)地震、雷、火事洪水の他は大低好き(一三)大正九年夏

斬髮せよ

井上刀三

「諸縣下頭髪一定せず西京は洋風を専ら用のべき御趣意ある故令を奉戴して大概斬髮なり滋賀縣下に至つては十に八九は鬘髮になりたり其故は鬘のある者は月毎に何程か納税いたさせ學校の費に充てたきこの許可を得て區戸長よく令せし故餘儀なく斬髮の者多し」これは明治六年七月『新聞雜誌』に掲載された記事である。これを讀んで僕は吾國當時の人人々が如何に斬髮を悲しむ、且丁髷に愛着さ未練を持つてゐたかが判り、更に轉じて現代所謂傳統川柳家の氣持と一致してゐる様に思はれて苦笑せざるを得ない。

川柳に於ける進化論これは餘りに陳腐かも知れないが、社會とこれに伴ふ文化は、時流に並行して、新しきへ、新

しきへ進んでゐる。明治初年の人達が斬髮に躊躇した結果有髮者には特別に課税した滑稽さは、今日吾人の到底想像すら出来ない事實である。寶曆明和の生んだ古川柳の域より戀々として脱し得ず、川柳は抑も、柄井八右衛門の創造に係る、なんて考へて、ラヂオの電波が宇宙に交錯してゐる今日の事を思はない傳統川柳家は、當に明治初年丁髷に愛着を感じた、人々の無智と頭迷に等しいものではあるまいか。

○既成川柳家の暗愚さは、東海道五十三次を尻からけよろしく徒歩で樂まんさする、大正の彌次喜多である。ところが今日では、東海道を行くに完全な急行列車の鐵網がある。彼等が大阪あたりで、痛い脚をさすつて道尙遠きを嘆息してゐる頃には、賢明なる列車の人は、既に富士山の壯觀を車窓に讚美してゐる。彼等が桑名の蛤に舌鼓を打つてゐる時分には、銀座あたりでシユークリームの甘美を味はつてゐるか

も判らない。春日遅々白砂青松の邊に頃はしき一步を運ぶ時、傳統川柳家よ、碧空にあつては快よいプロペラの爽音清々しくも聞こえて来るではないか。

○傳統川柳家よ、花道に反り返る○△屋振りの型を喜んだり、羽左の白科を暗誦して得意がる暇を、ラモンナパロの大寫しても見たらさうだ。三味線を聞く耳で、バイオリンの音色をデット味はふのも敢て徒勞ではなからう。粉飾よろしく大道を練り歩く花魁の道中が何處を捜してもない今日、傾城藝者、仲居等々もいゝ加減にしたらさうだ。

○傳統川柳家よ、郷等は徒らに、京人形の美しさも、靜けさに感激してはならない。名もない古典に詠嘆的な讚美を與へてはいけない。垢染みた暖簾の觸感に陶醉してはならない。少さも雪中に梅を賞し酒を酌むの愚を敢てする勿れ。そのむかしお染が戀を語つた藏

の中には横文字の書いた異様な商品が山積されてゐるかも知れない。

○吾々は、體革新なるの三辭を嫌へ。

唯既成川柳を以て丁髷川柳と言ふのみ

古川柳を基調させる既成川柳を唯一に

に跳梁する川柳家を以て、丁髷川柳家

也と言ふのみ。僕不幸にして未だ川柳

に達成せず。從而革新傳統を云々す

るの無謀を恐る。尙且僕自身の句革新

傳統の何れに屬するやも知らず。けれ

ども古川柳の舊套を脱し得ざる丁髷川

柳家に非ずして、アナクロニズムを排

せんとする熾烈な川柳進化論者である

尤も無味乾燥、神經發弱的文字の羅列

に依つて、自ら革新也と稱する小輩に

寧ろ嫌惡を感じる者なる事を、言つて

おく。

○全て革命は常に時代ニ呼應して、健

全なる物の進展を促すものである。『

新しさ』唯これのみでも既にある意味

に於て、氣持のよいフレツシユさがあ

るではないか。

この意味における革新川柳家の努力も熱情は涙ぐましい雄圖であらねばならない。

近時丁髷川柳家往々にして、この壯圖

の空しからん事をねがひ、甚だしきは

これが撲滅を圖る。彼等の頑迷にして

卑劣なる寧ろ憫笑すべきである。

○新しきより生れて、一步進めばこの

新しさは既に陳腐であらねばならない

古きより生れて、進化する尙更である

然るに丁髷川柳家の、或者は、古きよ

り出でたる一事を以て、往々革新川柳

家に向つて醜劣なる言を逞うす。

『舊家に生れたる兄さ弟、後年弟

の方出世して大臣になりたる時、兄甚

だ面白からず、弟に言へる様手前も

矢張り俺さ一掃の家で生れたのぢやないか』さ不貞腐れるに等し。

○要するに、既成川柳家は、あまりに

狹量である。所謂革新川柳に、ぞつこ

ん惚こんでるながら、咽喉から手が出

てゐる辭に、つまらないブライトのた

めに、今更革新ちやあるめいさ云ふ着みがあつたりして、轉がつてゐる寶石にすら手が出得ないのだ。安價な見

得のために、あはれむべき彼等の群は

せめても不貞腐れて精神的自瀆を續けてゐるのだ。

○軒切に市長へ管をまいても、始まらない。都市計畫は、そんな事に向拘泥

せず目的通り段々軒を切つて行く。三

百年來の舊家だなんて力んでみても結局駄目だ。だから云ふ其處等に蠢動せ

る傳統川柳家よ、もういゝ加減に卿等

が戴くその煩はしい丁髷を斬つて了つてはさへをばり)

新戎橋より

万よし

足跡

吉野山の清水院の庭に、辨慶の力釘さいふのがある。辨慶が悲憤のあまり、庭にある岩へ、五寸釘を拳骨で打ち込

人

林田馬行

んだものだ。
山伏の先達に變装して、靜女史を涙を以て追ひかへした吉野山の辨慶には、ふさはしい事蹟ではありませぬか。一生に何千萬歩も知れぬ足跡を、一つの力釘に残して置くのが吾れ等の川柳です。

川柳第六感

往年政友會内閣が出来る前、内閣の顔觸れについて各記者が野田大塊翁を訪ふた。翁語らず、電燈を仰いで大笑す第六感の鋭き一記者野田暹相を吊報して同輩を驚かせた。電燈から暹相を想ふたのである。
一塊の密雲を見て雷雨の來るのを知るのは漁夫の六感で、一葉落ちし天下の秋を知るのは達人の六感である。
笑ひの中に涙を見、涙の中に慰めを見、慰めの中に心配を見、心配の中に望みを見、望みの中に不安を見、不安の中に光明を見付けるのが川柳第六感です。

「川柳家は人がいゝ」私は此頃になつて、頻に斯う思ふ。成程川柳家は人のいゝ人達はなからう。利益とか口錢とかに頭の全部を奪はれてゐる生活から脱れた私は、せめてものこの川柳家に依つて慰まれ、この川柳家に依つて生甲斐のある事を痛切に感ずる。
川柳家!! なんぞ云ふなつかしい人達であらう。それが政治の話であらうが芝居の話であらうが。遊びの話であらうが。日々の生活の話であらうが見てこの川柳を透しての話ほさ愉快な楽しいものはなからう。
私は川柳を禮讃する。と共に亦この人のいゝ川柳家をも禮讃しなければならぬ。かの柳祖柄井八右衛門にしたつて、きつ三人のいゝ人物であつたに違ひない。あの八右衛門の肖像を見て尚更私はさう思ふ。この柳祖に依つて選ばれた柳多留の多くの作家もみんな

揃つてきつ三人のいゝ人物ばかりであつたに違ひない。柳多留の句を讀びに及んで斯うした人のいゝうれしい人達を殊更なつかしく思ふ。
斯うした所に流れをくむのか知らないが、この頃の川柳家を見渡してもみな人のいゝ人達ばかりである。
早い話がこのせち辛い世の中にあつて。たゞそれだけが僅か計りの負擔にするこの川柳の爲めに個人誌を出す川柳家のゐるのを見ても解る。是を以て單なる川柳的野心さゆみ見るのは酷である。つまり人がいゝからである。私だけかも知れないがさう思ふ。
川柳家はそうしてすぐ氣派を作る。敵を作る。そしていがみ合ふ。本誌が古句評釋に僅かばかり頁を割いたから云つてはすぐそれへ楯を突く。もつと現代句の批判をやれ云ふ。そして自分の雑誌の巻頭に十年一日の如くのたばるあの肩のこる文章や、はき溜め式埋草の愚劣さをも忘れた様な表情で

ゐる。是つまり人がいゝからである。或川柳家が藏書の廣告をしたから云つてはすゞそれへ二人も三人も喰つてかゝる。そんな事に二頁や三頁費して了ふ。雜誌の競争が出た云つては病的に神經を動かす。そして吃驚したやうに本誌は明治何年の創刊にて候てな虫の食ひかゝつた看板を藏から引つ張り出して來ては掲げる。

斯うした第三者から見ると何の興味もない。むしろ馬鹿くしい事を平氣でやつてゐる。云ひたい事を云ひやりたし事をやるつまり人がいゝからである。然し私は斯うした人のいゝ人達をさうして憎む氣になれやう。是らの人達がたまへ私を私達を批難攻撃したとしてもさても怒る氣持にはなれない。私は斯うした人達が好きであるからである。さつぱらんな、云ひたい事を云ふ川柳家を私は常日頃からなつかしく思つてゐる者である。

「川柳家は人がいゝ」斯うした私の川柳家観は今後いつまでも續く事であらう

通釋二篇素讀(二) 省一

一月上旬家庭の不幸に會し、三週日餘旅行した不在中、柳雨翁から本誌一月號の拙稿に對し御注意を頂いてゐた。今後とも御異見のおありの方は直接自分(朝鮮光州)に宛て御垂教を賜はる様に、お願して置きます、其方が誌上の整理にも亦研究にも好都合に存じます(二〇)正月は手路次のかぎをかり(柳雨)貴説 卯木説も御尤もではあるが、原解に家賃が満足に拂は無いし、ごある、拂ては無いしは責めて家賃でも満足に拂つてあるなら、夫得氣兼ねする要もあるまいのに意味が含まれてゐるようである、さすれば正月早々から家賃の滞りある弱味で揉み手をするご解しても不都合はないと思ふが如何でせうか。

(省二)私は此句面から家賃に迄も想像させなくても、意味は充分徹底し得るご存じたのです。従つて拂つては

言ふ様な事を全然頭で置かずに考へさせられました。

(二五四)里歸り女關に杖はなねぢり(柳雨)原解は確に間違であらうと思ふ、大體に於て貴説と同じであるが、只杖を勾當させられたは如何、之はそんな立派な盲人ではなく、配當座頭といつて吉凶の時にねだりにうせる、卑しき盲であらうと思ひ升。

(省二)お説の通り杖は自分も元來さう解してゐたのですが、實は殊更に杖はなねぢりさを、全く反對のものに陳べてみたのでした。

(二五八)の「一村をすいにして立つ旅芝居」の如きもあんなにかけて解して見ましたが如何でしよう。

(二六三)出づ云ふ振袖はきたぎだした(柳雨)下五が以前から疑問の言辭である、詳細に御説明を欲す。

(省二)そこ迄の深い注意ご研究は致してゐませんでした、自分は不活潑な重々しい(或は重苦しい)ご言ふ位に考へてゐました。

(二九七) つみ髪の前厄らしい美しさ

(柳雨) 前厄後厄の解は大辭林にさうある以上は貴族の通りであらうと思ひ

升が、私は此句の場合さう解すればよ

いかに一寸迷はされます、美しい茶筥

髷を卅二の後家とすれば少う姥櫻の色

褪せたかの感があるのみならず卅二

後家になるに云ふ凶事との關係が徹底

せぬやうにもある、序に御諒解を仰ぐ

(省二) そうです、自分も此句の場合

の前厄に就しては、幾度も首をかしけた

のです、其後もト田博士の辭典其他を

みました自分の申上げたのと同様な

のです。今は只此句の生れた時代一般

に前厄と云ふ事が、ごんな風に川ひら

れてゐたかを、他から考證せねばなら

ぬと存じてゐます。

(四七三) うち出頃、雪はくちをねり

(柳雨) 私ち貴解と同感なれども、二

丁町の近所にも壺屋と云ふ泡雪料理が

あつたため、山椒氏が迷はれたのも無

理はあるまいと思ふ。

(省二) 全くです。貴翁の『川柳江戸

歌舞伎』にも圖が載つてゐますね。斯る句は類吟に依つて推考してゆくより策はないでしょう。

(四八二) よし盛へ經とておしよせる

(柳雨) 此句は兼て私は貴説と符節を

合はせたやうに同説であつたのである

鎌倉は經の名所は云へ只經が取れた

からして、和田邸へ押掛けるに云ふ意

義が解らぬ、經は烏帽子魚と云ふので

烏帽子を被つて陣頭に立ちし巴御前を

臭はして、鎌倉の若殿原が水でも祝ふ

氣でワイ々々々義盛へ押掛けたと解し

たい氣がする。

(省二) 御贊成を得て嬉しく存じます

参考書及古い雑誌を喪つたので、モウ

以前に御發表になつたものもありまし

よう、今度の旅行で昔の雑誌の借覽を

願つてきた様な次第です、貴著川柳難

句類解を數年來探してゐますが運があ

りません

(二四八) はやりの目の一側、吳服店

(柳雨) 大丸でも布袋屋でも大きな吳服屋は、大勢の丁稚居たるべければ、越

後屋このみ限定する要はあるまじ、無論越後屋の句にして些かの障はない句主の意は其つもりであつたかも知れぬ

(省二) 恐らく句主は越後屋の名譽を

味ひだもののです、斯く後人が察する

程越後屋の句は澤山残されて居るから

です。尙ほ古川柳中に流るる一派の精

神例へば極端に美を愛し醜を憎む)か

らも吳服店の代表が越後屋である所に

江戸趣味の半面が現はれしります。今

日の三越に夫れ丈けの意義のないのは

經濟關係もありますが、思想の變遷推

移の然らしむる所でしよう。

柳壇のぞ記

徳田双柳

川柳は面白い、こは誰やらがいつて

るた全く川柳は面白いそれ丈けで澤山

だ、女房は忘れても川柳は忘れんぞ

てな洒落を聞いた事もある。尙坪内博

士は川柳は詩界のバックであるといつ

てゐられるなる程さうかも知れん私

もそう思つてゐる、僅か十七字の中に

あれ丈けの事を含んでゐるんだから一

句の川柳を考へれば考へる程想像をめぐらせば廻らす程廣く大きくなつていく僅か十七字にまこめられた句を若し文章にしたならばおそらく原稿紙の五枚や十枚は優に費されるでせう又この川柳を一の劇として組立てゝも立派な喜劇悲劇諷刺劇として表はれるだらうと思ひます

その面白くて偉大な力ある川柳である事は大分知つても作句するこいふ事は仲々難かしい殊に私の様に未だ社會見聞の浅い輩に於ておやでありませうよしそこに一の川柳的ヒントが得られてもそれを十七字位のものにまこめてもそのまごめた句が果して得られたヒントの幾分を表はし得てゐるでしうか得られたヒントの全部を否八パーセントも表は相違するには少からず研究を要するものと思ひます、所が私は時折り川柳はごんごんなものやこいふ質問に出遇つて大分困つた事がありますがそのこいふ時は大概路那先生の著はされた

川柳ふこころ手を黠つて暫く見せておきますよ、大概の人は成程ミ聊か得心した様に思はれます、それからアブナイながらに川柳についての感想を話すこいふ具合で研究をしてゐます。

尙私を感じてゐます事は川柳家の大部分は一般世人より何處もなく超越した所がある様に思はれますこれは私が川柳の目で觀察してゐる勢が知れませんが、矢張り一般世人より一倍超越した行爲を敢てなし得るのはさうして川を研究してゐる人の特長かとも思ひます私はこの超越こいふ事を大變好んでゐるものであります、罪を犯さぬ限りの超越はチツトモ差支へないとして大いに超越すべく努め度いと思つてゐます、超越それは川柳が齎す贈りとして偉大なる力ある面白い川柳を研究し度いと思つてゐます。

戯作「童謡くずし」半六

邪瑠璃の作者松雨さんへ
なんこみなさん器用なこよ、犬の股

から鶏卵生して、犬ちやあるまい蚤でござる、蚤煮て喰つて豆狸になつて、赤い衣物着て徳利さけて、奥の細道酒買ひに、二十日鼠が角樽せよつて裏の籤からちよこく走り、あの山越ねて猫の嫁入りいたちの仲人、婆のむじながおはぐろつけて、さぶの石崖ちよろり覗く、キチギチ坊主よそらなんので啼く、たつた一人の殿御さん、おたかにさられて今日七日、七日と思へば十五日、十五日のお月を手にしたせて、柴川へ身を投けた、雨のちよほく降る晩に、カニが目玉をちよいこ出してみればごちようにあらずして、思ひがけないなますさん、あれ虫が啼くこほろきが寒い北風村から村へ、サヌキ川津の日暮の鐘に、子守背の子一緒に泣けば、春が来たそら春が来た、ほーほーほーたるこい高い峰から一の橋かけた奥の大山狐火だらけ

川柳塔

○ 原 史 風

祭までもたす頭ににして歸り
氣に病んで死んだミ兄は聞かすなり
岩おこし頼まれたのが最後なりしか
怖かつた夢は御飯をつぎ乍ら
里の母二年前から來る便り
あの年で噂矢つ張り嘘でなし
借りに來た手に唐紙の重たすぎ
錢らしい云ふで一錢出してやり
履き心地高れるまでに酔ふて居す
或る時は電氣仕掛になる女房
乳呉れミ泣いてゐるのが聞ぬんか
交叉點物云ふやうな巡査の手
煙草の輪車掌の鼻のミこ下消ぬ
もう一度戻つて傘を借りて行き
左様ならミ子供へ云ふも世辭の内

○ 塚 崎 松 郎

鳥籠ミ從卒春の日をあびて
親分の罪被て寒さつのりけり
よく似てるいふ話から理にをちて
乞食にいくらかやつて男に追付けり
麗かさ草を結んで戻りけり
格氣する女房ミ見ぬ眠りやう
足音に立上るのは初手の戀
數もない唄繰返し門に立ち
兄弟三人うさんの湯氣の中に居る
捨鉢へ流れるものに米の水
母親の機嫌植木を買ふて來る
倫落の今日も灯のいろ水のいろ
○ 伊 藤 彦 造
モルヒネがあるミは知らぬ強意見
妻の留守ズボンのまゝで米をミぎ
○ 林 田 馬 行
物足らぬ夫婦の仲に鳴く猫よ
三月病んで今日中折をはたいて居
寢ろくミそこな子供に眼が届き
みな我れの心に返り寢に這入る
ステツキは柵に忘れて父ミなる

考へりや彼女の爲めの日の多き
窓一つ幸あれかしミ夫婦者
憂ひみな枕が吸ふて朝こなる
稼ぐ朝々新聞のいゝ匂ひ
半生は女こられた歴史にて
考へりや辨當箱に似てる也
第二の戀 第三の戀速いこも
嫁た日から僕に始まる黄な世界

○ 西垣松雨

カ餅まだ頂上へ十五丁
見込まれて歐洲行きの人こなり

○ 松本助六

物干で亭主の戻るのを見付け
番頭は出て行き硯乾いて來
雪洞に馴れた舞妓の顔つ付き
硯箱借るに結界入り替り

○ 關本雅幽

寢轉んでばかり破壊の夢ばかり
心から見捨てなかつた香を焚き
歸りにくゝなるこは知らず國を出つ
心にもなかつた訛びに香を焚く

○ 庄万よし
思ひ切り笑うた後の春霞
おしまひに泣きさうになる曲馬の兒
非常警戒をからかはんき呑んでる
ちやんこ解つてますこあちらら斗り向き

○ 岩崎柳路

空瓶を賣るへ姑口を出し
痰壺を引つくり返す程に酔ひ
月掛けの事で屋形に揉めが出来
化粧する女を見てる麗らかさ
萬歳は痛いこ思ふ時もあり
交代の車掌の口がまだ動き
郊外の電車で會ふたお嫁入り

○ 麻生葎乃

夕焼を残して雀寝しづまり
種子箱の中の種子にも似たる君
産めよ殖えよ地に充てこ囀るよ
暮れ切つた街へ車掌の聲がする

○ 森田輝翠

夜遊びをする程馴れた一人旅
土筆插み草を枕に子を寝かせ

往診へ隣の部屋も明くする

○ 吉川 啞人

退職金まあその邊に猪口をさし
告訴はするな女は呉れてやれ
片親になつて子の云ふ通りにし
席順になるに要らない遠慮をし
初戀は矢つ張りあつたヨイトマケ
麗らかさ後一人飯を喰ひ
胸算の女房に鍋の蓋がすれ
泊り客先きに見つける今朝の雪

○ 黒木 莢豆

缺點をかくすところを憎くまれて
病持ち倒れてやまん覺悟をし
背きし女の丸まるに生み
佗しさは茶碗の鳴らぬ日の多し
愛嬌よしの女探して稼がそか
きらわれりや蜂になれく男の子
燃わかすやよつて長生きして御座る
恵まれた奴らが花を踏みにじり
曉け方の白き額に吸はれたり
うらゝかさ知らすこの頃眼が干き
居候の蠅になりたい氣にもなり

○ 太田 朝陽
縫ひ取りへいつのまにやら暮れてゐる
家出するつもりか預金みんな出し

○ 井上 刀三

秘密を知らず藤村ばかり讀む
算盤へ一杯になる數であれ
變心は寒い夜風に掻き合せ
百圓もあれば晝まで寝てゐるに
心の緩みか此頃世辭を言ふ
轉寢の氣儘密柑がほしくなる
薄情の喰べたくないを押し通し
電話では一べん來いと言ふた丈け
嬉しきはひそかに嫁を持つ心
メリヤスの汚れる頃は戀もなし

○ 酒井 駒人

嫁取つた友へ無沙汰が續くなり
當分は義理で仕事をすけて居り
○ 橋本 二柳子

山茶花は散つても寒さまだ寒し
塀の外へ松葉が落ちるばかりなり
飯を焚く暇も小説讀む女
經を讀む中へ町から戻つて來



編 輯 後 記

第一日曜には川柳雜誌社同人の吟行會があることになつてゐるからである。

▲近作柳樽の募集句數は從來五十句であつたのが前號から三十句に減らしたので、間違ひではないかとの質問が出た。實は應募者が段々殖ひて來るので、僕の選が僅かの日數に迫りやりきれなくなつて減らしたのであるから諒せられたい。

本社三月例会

時 日 三月五日午後六時
場 所 大阪市南區日本橋一丁目
交叉點北の辻東入

日 本 橋 俱 樂 部

兼 題 「車 掌」三句
會 費 三 拾 錢

▲同人はみんな元氣だ。それで川柳雜誌はすこやかに育つて行く。二月號は非常な勢ひで賣り切れになつた。それがために二柳子君が一番頭を悩ましてゐた。

▲僕は新春川柳大會を終へてからすぐ、公用で東上した。そして二句に近い日をあちらで宿屋生活をしてゐたので、三月號は同人諸子の骨折で出るこゝになつた。ところが原稿編輯で、僕自身の原稿もその他の原稿も次號廻はしが多數に出來る盛況を呈した。次へ廻つた人は不惡おゆるしを願ひます。

▲遅日莊柳談會は三月は休む事になつた。それは、僕が再び東上するかも知れないのこ

を感謝します。その他の方にもお目にかかりたかつたのですが、何分公用で忙しかつたので失敬しました。

▲同人龜井花童子氏は一月中兩腕に脈物が出來て困つてゐたさうですが、漸く快方に向つたので今後大いに活躍する旨を知らして來られました。

▲同人酒井駒人氏は病氣で從來の千葉へ歸られました。

▲同人馬場月兔氏は目下病院通ひださうです。一日も早く快方に向けられん事を祈ります。

▲第三卷第二號川柳塔の「妹は何思ふのか穴を見る」莢豆は「空を見る」の誤。

▲福田戲多通氏は山雨樓に、江口啓進子は小猫に改號、田中三平氏は大阪市住吉區天王寺町北畠市設住宅八九號へ轉居。

▲二月號一九頁手袋の句「シヨールついでに手袋買はせられ」は白蝶氏の句であらず、杏三氏の句は「シヨールのついでに手袋買はせられ」だとのこゝに付き訂正。

▲同人駒井美の作君は近來健康を害されてゐるさのこゝ驚いてゐます。一日も早く全快されんことを祈ります。

▲同人藤本卯之助氏は第一世一君を擧げられました。同氏はお父さんになつて大喜びです。

▲本號は二柳子、松郎、馬行、刀三、と私まで編輯しましたが、私はあまりあつたつてゐません。

(路郎生)

「探偵趣味の會」推薦雜誌

キネマ雜誌界の權威
探偵小説界の明星

映畫と探偵

(毎月一回
一日發行)

キレイな活動寫眞の口繪
面白くて堪らぬ探偵小説

〔定價一部三十錢〕

映畫と探偵社

大阪市東區農橋二丁目

電話一七〇番 七〇七番

辻井青湖君は私の古い友人
です。火災保險の代理店を
はじめたので川柳家の諸氏
にもお願ひしたいところ
です。至急申込んで同君の
事業の幸先をよくしてあげ
てください。

遅日莊にて

路 耶 生

中央火災傷害保險株式會社

代理店

辻井商店

大阪市港區三條通り三丁目
三十一番地(築港市場)

社主藤堂氏の

ための悪文！

變人の古本屋である。時々お客さんに氣焔をあげて、あそこであんなことを云はればモット本が賣れたらうに、後悔をするところなど仲々うれいおちさんである。なんでも社會に貢獻するために本屋をはじめたのださいふてゐるがさうかも知れない。大いに讀んで（大いに買つて）このおちさんを満足させて下さい。

|| 路 耶 生 ||

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五六二番

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記する。

▼締切は厳守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入のこと。

募集

第三卷第五號課題

三月十日締切

(各題二十句以内)

細引

白石維想樓選
吉川啞人選
太田一聲 共選
蜂橋本二柳子

第三卷第六號課題

四月十日締切

(各題二十句以内)

▼犬 蛭子省二選
▼煙 麻生葦乃選
▼辯 原史風共選
高橋かほる

每號募集

▼近作柳壇(三十句以内) 麻生路郎選
▼各地柳壇(會報) 塚崎松郎編
▼文章(評論研究吟行漫文)

社告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價定

一部 參拾錢(郵)
六部 壹圓六拾錢(稅)
十二部 參圓(共)

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みにするのが一番確實でありませぬ▼誌代受領は送本によつて御承知願ひませぬ▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひませぬ▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひませぬ、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひませぬ▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひませぬ▼川柳雜誌に關する御用件は簡人宛にしない事

大正十五年二月廿五日印刷

大正十五年三月一日發行

第三卷第三號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸一郎
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地

發行所 川柳雜誌社
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地
振替大阪三一五一四番

大阪市港區八條通二丁目十一番地

川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番

賣捌書店
(大阪) 明文堂 公立社 柳屋 岳文堂 和正堂
(東京) 東條 (京都) 三宅 (神戸) 米田
(金澤) 石井 (松任) 三須 (函館) 石塚

よろこびにそへて白鶴届けとき
 榮轉の今日も白鶴呑み續け
 白鶴がいつものバーへ運ばせる

清 酒



灘 津 攝

嘉 納 合 名 會 社 釀

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
 大正十五年二月二十五日印刷 大正十五年三月一日發行

第三卷 第三號（第二十六號）

定價金參拾錢